

論点資料補足資料

(学習指導要領関連記述、諸外国の事例等)

現行学習指導要領の考え方

新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実

学びを人生や社会に生かそうとする
学びに向かう力・人間性等の涵養

生きて働く知識・技能の習得

未知の状況にも対応できる
思考力・判断力・表現力等の育成

何ができるようになるか

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、
社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む
「社会に開かれた教育課程」の実現
各学校における「カリキュラム・マネジメント」の実現

何を学ぶか

新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた
教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

小学校の外国語教育の教科化、高校の新科目「公共」の
新設など

各教科等で育む資質・能力を明確化し、目標や内容を構造的に示す

どのように学ぶか

主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・
ラーニング」）の視点からの学習過程の改善

生きて働く知識・技能の習得など、新しい時代に求められる資質・能力を育成

知識の量を削減せず、質の高い理解を図るための
学習過程の質的改善

主体的な学び

対話的な学び

深い学び

学習指導要領解説における育成を目指す資質・能力に関する記述

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編 第3章 教育課程の編成及び実施 ※中学校、高等学校も同旨

第1節 小学校教育の基本と教育課程の役割

3 育成を目指す資質・能力

① 知識及び技能が習得されるようにすること (略)

知識については、児童が学習の過程を通して個別の知識を学びながら、そうした新たな知識が既得の知識及び技能と関連付けられ、各教科等で扱う主要な概念を深く理解し、他の学習や生活の場面でも活用できるような確かな知識として習得されるようにしていくことが重要となる。また、芸術系教科における知識は、一人一人が感性などを働かせて様々なことを感じ取りながら考え、自分なりに理解し、表現したり鑑賞したりする喜びにつながっていくものであることが重要である。教科の特質に応じた学習過程を通して、知識が個別の感じ方や考え方等に応じ、生きて働く概念として習得されることや、新たな学習過程を経験することを通して更新されていくことが重要となる。

学習指導要領解説における育成を目指す資質・能力に関する記述

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編 第3章 教育課程の編成及び実施 ※中学校、高等学校も同旨

第1節 小学校教育の基本と教育課程の役割

3 育成を目指す資質・能力

② 思考力，判断力，表現力等を育成すること

児童が「理解していることやできることをどう使うか」に関わる「思考力，判断力，表現力等」は，社会や生活の中で直面するような未知の状況の中でも，その状況と自分との関わりを見つめて具体的に何をなすべきかを整理したり，その過程で既得の知識や技能をどのように活用し，必要となる新しい知識や技能をどのように得ればよいのかを考えたりするなどの力であり，変化が激しく予測困難な時代に向けてますますその重要性は高まっている。また，①において述べたように，「思考力，判断力，表現力等」を発揮することを通して，深い理解を伴う知識が習得され，それにより更に「思考力，判断力，表現力等」も高まるという相互の関係にあるものである。

<課題①に関連した指摘>

令和4年度小学校学習指導要領実施状況調査結果において、「知識及び技能」について、事実的な知識は一定程度の定着が見られるものもある一方、**知識の概念としての習得や、習得した知識を日常生活に当てはめたり、現実の事象と関連づけて理解することには一部に課題**があると考えられるとの指摘。

算数 第4学年 簡単な場合についての割合

5 ゴムひもAとゴムひもBがあります。
それぞれのゴムひもを、ある長さで切ったときに、
いっぱいまでのばした長さを調べました。

ゴムひもA		ゴムひもB	
のばす前	のばした後	のばす前	のばした後
10 cm	⇒ 30 cm	40 cm	⇒ 80 cm
20 cm	⇒ 60 cm	60 cm	⇒ 120 cm
30 cm	⇒ 90 cm	80 cm	⇒ 160 cm

ゴムひもAとゴムひもBは、それぞれ何倍のびるゴムひもといえますか。それぞれ の中に書きましょう。

ゴムひもA 倍のびる

ゴムひもB 倍のびる

通過率 76.1%

二つの数量の関係から、ゴムひもの伸びる割合を求める問題

「二つの数量の関係を捉えて求めた割合を用いて、一方の量からもう一方の量を求めることができる」という**概念として習得した知識を活用し、2種類のゴムひもの長さの大小を判断し、説明する問題**

5 ゴムひもAとゴムひもBがあります。
それぞれのゴムひもを、ある長さで切ったとき、いっ
ぱいまでのばした長さを調べました。

ゴムひもA		ゴムひもB	
のばす前	のばした後	のばす前	のばした後
10 cm	⇒ 30 cm	40 cm	⇒ 80 cm
20 cm	⇒ 60 cm	50 cm	⇒ 100 cm
30 cm	⇒ 90 cm	60 cm	⇒ 120 cm
⋮	⋮	⋮	⋮
120 cm	⇒	120 cm	⇒

ゴムひもAとゴムひもBをそれぞれ120 cmに切りま
した。120 cmのゴムひもAと120 cmのゴムひもBの、
それぞれをいっぱいまでのばした長さをくらべると、ど
ちらが長いといえますか。次の1から3の中から1つ選
び、その番号を の中に書きましょう。また、その理由
を、数や式や言葉を使って の中に書きましょう。

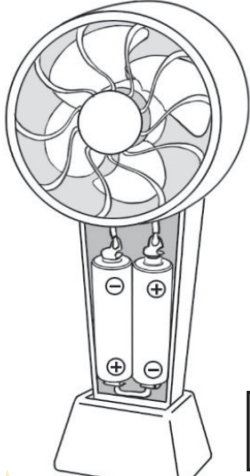
- 120 cmのゴムひもAをいっぱいまでのばした長
さの方が長い
- 120 cmのゴムひもBをいっぱいまでのばした長
さの方が長い
- どちらも同じ

【通過率 40.7%】 番号

理由

理科 第4学年 電流の働き

(3) 太郎さんたちはかん電池を使ったおもちゃを組み立
ててにしました。太郎さんたちが作った携^{けいたい}带式
せん^き風機の電池ボックスのふたを外すと、中はこのよう
になっていました。これは、かん電池の何つなぎですか。
次の の中に書きましょう。



通過率 41.3%

正答例 **直列つなぎ** (28)

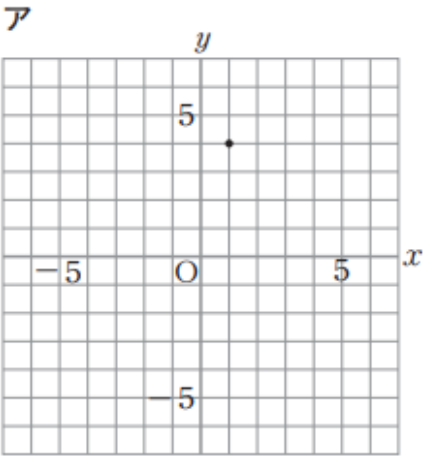
乾電池の「直列つなぎ」「並列つなぎ」の違いにつ
いて**習得した知識を日常生活に当てはめて、乾電池のつなぎ方を判断する問題**

方程式と関数の概念の違い

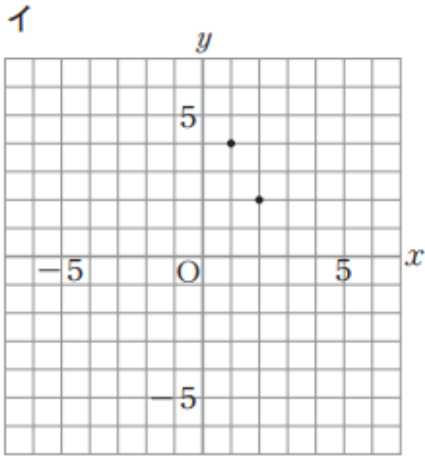
<方程式> 特定の条件の時のxやyの値を求めるもの (※グラフ上では、「点」で表現される)
<関数> xとyの関係性の変化を表すもの (※グラフ上では、「線」で表現される)

12 下のアからエまでの中に、二元一次方程式 $2x + y = 6$ の解を座標とする点の全体を表したものがあります。それを1つ選びなさい。

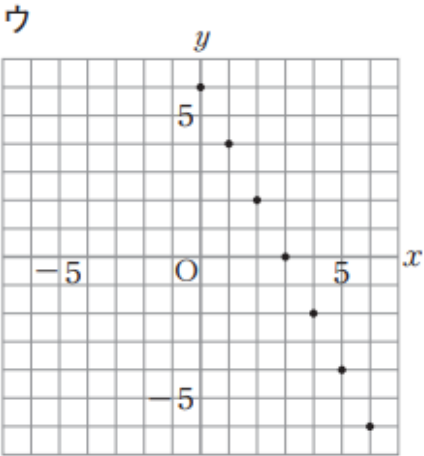
×誤答6.8%



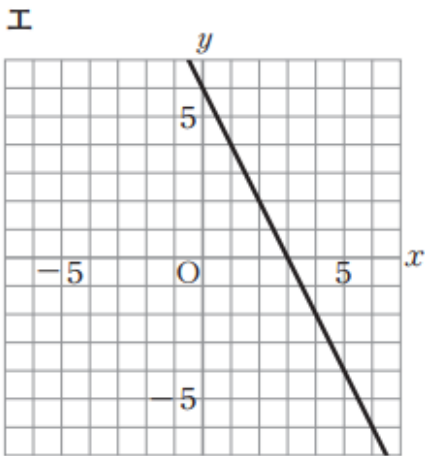
×誤答12.6%



×誤答41.9%



○正答36.7%



教育課程の基準の構造化に向けた諸外国の動向

- ・ 諸外国では、「キー・スキル」「21世紀型スキル」といった、育成すべき資質・能力を重視したコンピテンシーベースの教育課程の基準に改革する動きが見られる。
- ・ 一部の国では、次の段階の改革として、核となるコンピテンシーや概念等を指す「中核的な概念」により、教育課程の基準の構造化に取り組む動きが見られる。

コンピテンシーベースによる教育課程基準の改革の進展

諸外国動向

EU諸国

- ・ イギリスでは1999年にすべての子供を対象に「キー・スキル」の育成を目指し教育課程の基準を改訂した
- ・ フランスでは2005年にキー・コンピテンシーの要素を取り入れた教育課程の基準に改訂した
- ・ フィンランドでは1994年に資質・能力を重視した教育課程の基準に改訂した。2001年の政令では、基礎教育の国家目標としての「コンピテンシー」が示された

北米

- ・ カナダでは、OECDが示すキー・コンピテンシーとは別に「21世紀型スキル」が定義された

オセアニア

- ・ オーストラリアでは、1990年代後半から国のレベルで「汎用的能力」を育成する体系的なナショナル・カリキュラムの開発と実施が進められた

アジア

- ・ 韓国では2009年にキー・コンピテンシーである「核心力量」を軸とした教育課程の基準を策定した
- ・ 台湾では育成すべき能力を明示する方向性に沿って2001年から新しい教育課程の基準に移行した

2003

「DeSeCo (Definition and Selection of Competencies プロジェクト)」にて、これからの社会で求められる「キー・コンピテンシー」を探究取組を1997年に立ち上げ「OECD・キー・コンピテンシー」を定義

2015

「OECD Education 2030プロジェクト」にて、OECDが2030年に向けて子供たちに求められるコンピテンシーの検討と、コンピテンシー育成につながるカリキュラム等の検討を開始

中核的な概念等による教育課程の基準の構造化に取り組む国・地域※1の出現

カナダ (ブリティッシュコロンビア州)

- ・ 2016年に教育課程の基準を全面改訂し、「KUDモデル」※2に基づき中核的な概念で教育課程の基準を構造化

オーストラリア

- ・ 2022年に教育課程の基準を全面改訂し「核となる概念」に焦点を当て教科内容を整理

韓国

- ・ 「核心力量」の方針を継続した教育課程の基準を2022年に公示「核心アイデア」と呼ばれる中核的な概念で教育課程の基準を構造化

台湾

- ・ 2019年に初等中等教育段階それぞれの教育課程の基準を一つに統合し、「核心素養」という中核的な概念で教育課程の基準を構造化

諸外国において、「中核的な概念」の性質（資質・能力全体に相当するもの、資質・能力の一部分である知識・技能に相当するもの等）、範囲（教科横断、教科ごと、教科内の学習領域等）、対象学年（学年共通、学年ごと等）は多様である。各国の「中核的な概念」の概要とその構造化事例を次頁以降に示す。

※ 1：諸外国の教育課程の基準に係る各種Webページを調査し構造化の事例を確認できた国を記載

※ 2：「Know-Understand-Do」の3要素からなる教育課程の基準のモデルを指す

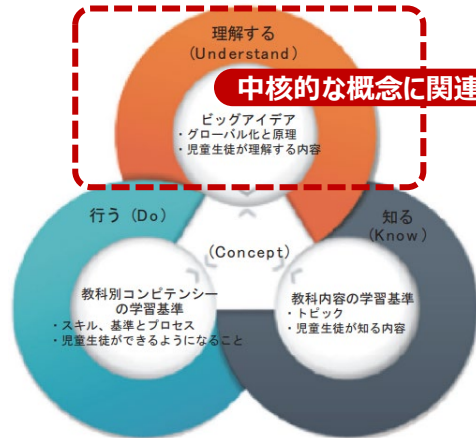
2020

「OECD Education 2030プロジェクト」の報告書の一つである「Curriculum (re) design」にて、「子供たちが特定の教科における基盤となる概念やビッグアイデアを理解し、それがどのように他の教科に適用できるかをわかるようにカリキュラムを構造化」することをカリキュラムデザインの原則の一つとして提言

(参考) OECD動向

＜方向性①②関連＞ 教科の中核的な概念等による構造化事例（1 / 5）

- 各教科の重要な概念や原理等を示す「ビッグアイデア（Big Ideas）」を各教科、1 学年ごとに位置付けている。
- ビッグアイデアと並べて教科別コンピテンシーや教科内容の学習基準を示している。



教育課程の基準で用いられている「KUD」*1モデル

✓ 中核的な概念に関連するもの : ビッグアイデア (Big ideas)

- 教科ごとに設定され、1 学年ごとに示されている
- 各教科で児童生徒が学年修了時まで理解する重要な概念や原理を指す

✓ その他教育課程の基準の中に示されている要素と中核的な概念との関係

中核的な概念に相当するビッグアイデアと併せて、教科内容の学習基準、教科別コンピテンシーの2つの要素も体系的に示されている。2要素の詳細は以下の通り。

- 教科内容の学習基準 (Content Learning Standards) : Know「児童生徒が知ること」として、各学年の必要不可欠なトピックと知識の具体的内容を示す
- 教科別コンピテンシー (Curricular Competency, Learning Standards) : Do「児童生徒ができるようになること」として、教科に特化したコア・コンピテンシーに関連する内容を示す

◆ 教科学習（算数）の教育課程の基準における「KUD」モデル*1を用いたコンピテンシーの構造化例

小学校 1 年生の算数の教科学習において理解することが期待される重要な概念や原理「ビッグアイデア」を各教科及び各学年の教育課程の基準の上部に示している

教科別コンピテンシー (Curricular Competency, Learning Standards) として、教科に特化したコア・コンピテンシーに関連する内容を示す

- ビッグアイデア、教科別コンピテンシーに対応する教科内容の学習基準が記載されている
- 名前、日付、式などの特定の事実情報ではなく、教科内の知識を整理するために使用される重要な概念、原則、理論や、専門的知識を理解するための鍵となる概念、原則、理論を含む

※ 1 : 「Know-Understand-Do」の3要素からなる教育課程の基準のモデルを指す

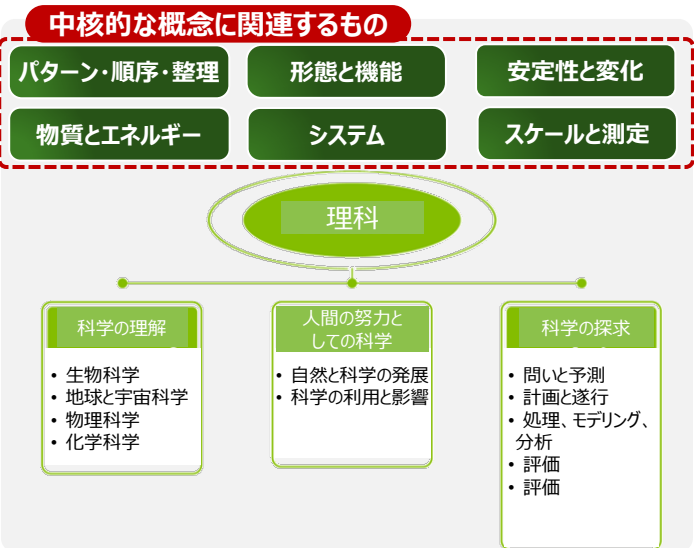
(出典) Building Student Success - B.C. Curriculumより仮訳

教科：算数 小学校 学年1	
ビッグアイデア 20までの数字は10と1に分けられる数量を表す - 具体的、図式的、象徴的にモデル化できる10までの数字による足し算と引き算を行い計算能力を養う - パターン内における繰り返し要素は識別できる - 物体と立体は記述、測定、比較できる属性を持つ - 具体的なグラフは、データを比較して解釈し、1対1の対応関係を示すことに役立つ	
学習基準	
教科別コンピテンシー 児童には以下を実践することが求められます。 推論と分析 - 推論を利用して探索し、つながりをつくる - 適正に見積もる - 数量を理解するための暗算戦略と能力を養う - テクノロジーを利用して数学を探索する - 文脈化された経験の中で算数をモデル化する 理解と解決 - 遊び、探求、問題解決を通して数学的理解を養い、実証し、応用する - 数学的概念を探索するために視覚化する - 問題解決に取り組むために複数の戦略を開発し利用する - 先住民のユニニティ、地域のユニニティ、そして他の文化に関連する場所、物語、文化的慣習、視点に関連した問題解決の経験に取り組む コミュニケーションと表現 - 様々な方法で数学的思考を伝える - 数学的語彙や言語を利用して数学的な議論に貢献する - 数学的なアイデアや決定を説明し正当化する - 具体的な形、図形、記号の形で数学的なアイデアを表現する	教科内容 児童には以下を知ることが求められます。 20までの数の概念 10のつくり方 20までの加算と減算（演算とプロセスの理解） - 複数の要素と属性を持つ繰り返しパターン - 具体的なかつ言葉で量で20に変化する - 等号と不等号の意味 - 非標準単位（非一様及び一様）による測定 2Dの図形と3Dの立体の比較 1対1の対応を利用した具体的なグラフ - 比較言語を用いた生活になじみのある確率 - 金融リテラシー—硬貨の価値と通貨交換

教科の中核的な概念等による構造化事例（2 / 5）

＜方向性①②関連＞

- 各教科の下に設定されている複数の学習領域を関連付け、学習内容の理解を深めるため「キーアイデア（key ideas）」を教科ごとに設定し、全学年共通のものとして位置付けている。
- 教科内容の習得を支援することを目的に設定される領域「ストランド」と、その下位に置かれる「サブストランド」で、教育課程の基準を整理している。



教科学習（理科）における学習領域（準備教育から10学年（中学3年生相当））

✓ 中核的な概念に関連するもの : キーアイデア（key ideas）

- 教科ごとに設定され、全学年に共通するものとして示されている
- 学年内及び学年をまたいで各教科の学習内容に関する一貫性のある理解を支援し、各教科の学習領域を関連付けるためのキーワードを指す

中核的な概念に関連するものの一つ **パターン・順序・整理** の内容（仮訳・一部抜粋）

科学の重要な側面は、私たちを取り巻く世界のパターンを認識し、さまざまなスケールで現象を順序付け、整理することである。児童生徒が基礎段階から10年生に進むにつれて、さまざまなスケールでパターンを観察して説明し、イベントや現象を整理し、予測するための分類を開発して利用することに役立つスキルと理解を構築していく。児童生徒が初等教育段階において学習する中で、原因と結果を含むパターンを支える関係を特定し説明することに習熟し、また、スケールがパターンの観察に重要な役割を果たすことを認識していく。

✓ その他教育課程の基準の中に示されている要素と中核的な概念との関係

教科に紐づく複数の学習領域が教育課程の基準の中に示されている。

- ストランド（Strand：領域）：各教科の学習内容についての理解を深め、その習得を支援するのを目的に設定される領域
- サブストランド（Sub Strand：下位領域）：各ストランドの下に4～5つ置かれる領域

◆ 教科学習（理科）の「科学の理解」ストランドにおける教育課程基準の構造化例

教科学習（理科）に設定されたストランドの一つの名称		小学校 1学年
「科学の理解」ストランドに紐づくサブストランドの名称		ストランド：科学の理解 サブストランド：生物科学
サブストランドの領域における学習目的		内容の記載 児童生徒は以下を目的に学習する
目的を達成するための児童生徒の活動内容		内容の詳細 児童生徒が以下の事項を行うことに関わる - 私たちの家や、池、国立公園、庭や動物園といった身近な場所を含めて植物や動物が生息している場所を特定する - 家でペットや植物を世話する際に何をしているか特定し、行動を類型化する - 生徒たちが持つ経験を基に、人間含めた多様な植物や動物のニーズを特定、比較する - 植物や動物が生息する場所のジオラマを作成し、植物や動物のニーズへの適用を可能としている特徴を特定する - オーストラリア先住民が生物をどのように保護しているか認識する - 植物や動物が食物や繊維の原料である観点も含め、植物や動物保護がなぜ重要か探求する

（出典）「Science: Curriculum content F-6」より仮訳

教科の中核的な概念等による構造化事例（3 / 5）

＜方向性①②関連＞

- 学習を通して一般化できる内容である「核心アイデア」を各教科に紐づく学習領域ごとに設定し、全学年共通のものとして位置付けている。
- 教科学習で学ぶべき学習内容を「知識・理解」、「過程・技能」、「価値・態度」の3要素で整理している。

- ✓ **中核的な概念に関連するもの**：**核心アイデア**
 - 教科に紐づく学習領域ごとに設定され、全学年に共通するものとして示されている
 - 各教科に紐づく学習領域の学習を通して一般化できる内容を指す
- ✓ **その他教育課程の基準の中に示されている要素と中核的な概念との関係**
 - 各教科に設定された領域の内容要素を「知識・理解」「過程・技能」「価値・態度」の3つの要素で分類し、教科固有の思考や探求過程を明示
 - 核心アイデアを中心に「知識・理解」「過程・技能」「価値・態度」や学年段階ごとの内容要素を関連づけている

◆教科学習（社会）における教育課程の基準の構造化例（学習領域「持続可能な世界」における表を抜粋）

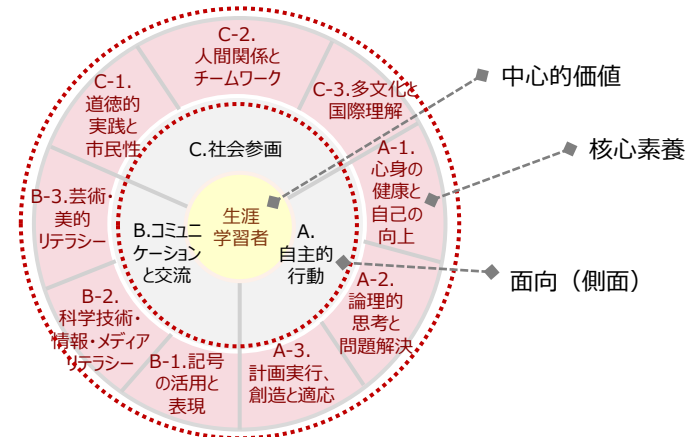
中核的な概念に関連するもの		内容要素		
核​心​アイ​デア		初等学校		中学校
カテゴリー		3～4年生	5～6年生	1～3年生
当該領域の学習を通じて獲得できる概念の核心を述べたもの 「持続可能な世界」の学習領域で知り理解すべき内容 教科固有の思考と探求の過程または技能 教科活動を通じて育成することができる固有の価値と態度 教科学習で学ぶべき学習内容	知識・理解	葛藤と不均等の世界 ・ — 持続可能な環境 ・ 私達が住むところの環境 ・ 住みやすい環境と生活の質 共存の世界 ・ —	地球村の葛藤事例 地球村を脅かす問題 均衡的な国土発展 ・ 分断と平和の場所	地域の統合と分離 ・ 地域不均衡 ・ 分断と接境地域 ・ 地域開発と環境問題 ・ 地域問題の解決 ・ 持続可能な都市 ・ グローカル環境 이슈 及び 持続可能な発展 韓半島の平和と統一 国土の未来像
	過程・技能	児童・生徒の観点で住みやすい環境の条件を列挙する ・ 均衡的な国土の発展のための方法を探索する ・ 地球村を脅かす問題解決のための努力を調査する		多様な利害関係及び価値をめぐる問題に対する自分及び相手の意見を批判的に検討し、合理的にコミュニケーションをとる ・ 地理的問題解決方法と実践方法を模索する
	価値・態度	私達が住むところの環境に対する感受性 ・ 生活の質と関連がある環境に対する関心 国土の美しさと生態的環境に対する認識 ・ 人類共通問題に対する関心		特定地域に対する自身の認識と観点に対する反省的省察 ・ 多様な価値、観点と意見について理解し尊重する開かれた心 ・ 韓半島の平和と統一に関する関心と平和感受性 ・ 地理的問題解決のための地理的想像力 ・ 環境問題の深刻さの認識及び持続可能な未来のための生態感受性 ・ 地域、国家、世界レベルから地域問題の解決及び持続可能な発展のために参画し実践する態度

(出典)「2022社会科教育課程」より仮訳

教科の中核的な概念等による構造化事例 (4/5)

<方向性①②関連>

- 育成を目指す資質・能力を記述した3つの「面向」(側面)とそれに紐づく9項目の「核心素養」(コアコンピテンシー)を全教科、全学年共通で位置付けている。
- 教科ごとに、「面向」と「核心素養」を用いて、教科学習において獲得すべきコンピテンシー内容を整理している。(次頁続く)



✓ 中核的な概念に関連するもの : 核心素養を具体化した内容を教科ごとかつ学校段階ごとに示した内容

- 9項目からなる「核心素養(コアコンピテンシー)」を具体化したうえで、教科ごとにかつ初等教育、前期中等教育、後期中等教育段階ごとにその内容を示している

✓ その他教育課程の基準の中に示されている要素と中核的な概念との関係

中核的な概念と一緒に、中心的価値、面向(側面)が示されている。教育課程の基準では、中心的価値を軸に、面向(側面)、核心素養の要素が構造的に整理されている。

- 中心的価値: 「核心素養」の習得を通して育成を目指す姿。「生涯学習者(Lifelong Learners)」として定義されている
- 面向(側面): 「生涯学習者」を構成する3つの要素を指す。「自主的行動」、「コミュニケーションと交流」、「社会参画」が定義されている

教育課程の基準を通して育成を目指す資質・能力・人物像

◆ 教科学習(英語)におけるカリキュラム内容の構造化例①(面向「自主的行動」に紐づく表を抜粋)

中核的な概念に関連するもの

面向	核心素養	核心素養の内容	英語における核心素養の内容		
			国民小学 (初等教育相当)	国民中学 (前期中等教育相当)	高級中学 / 高級職業学校 (後期中等教育相当)
「面向」の一つである「A.自主的行動」 「自主的行動」に紐づく「核心素養」であり、 「A-1.心身の健康と自己の向上」 「A-2.論理的思考と問題解決」 「A-3.計画実行、創造と適応」の内容 各学年段階の英語学習を通して獲得すべきコアコンピテンシー内容	A.自主的行動	健全な心身の発達、適切な人間性、自己観についての適切な見方を持つと同時に、新たな知識の選択・分析・応用を通じて、効果的にキャリア開発を計画し、人生の意味を探索し、常に自分自身を改善し、最高を追求する	まじめさ、集中力、よい学習習慣という資質を備え、基本的な学習戦略を用いて個人の英語能力を強化するよう努める	学習に対する積極的な姿勢を持ち、教室の枠を超えて学習を広げ、個人の知識を深める。様々な学習及びコミュニケーション戦略を用いて英語学習とコミュニケーションによる効果を向上させる	生徒たちは積極的に探索する姿勢を持ち、率先して教室の外で関連情報を探索し、学習の幅を広げ、英語力を高め、様々なリソースを活用し、自主的な学習を強化し、生涯学習の基礎を築く
	A-1.心身の健康と自己の向上	健全な心身の発達、適切な人間性、自己観についての適切な見方を持つと同時に、新たな知識の選択・分析・応用を通じて、効果的にキャリア開発を計画し、人生の意味を探索し、常に自分自身を改善し、最高を追求する	まじめさ、集中力、よい学習習慣という資質を備え、基本的な学習戦略を用いて個人の英語能力を強化するよう努める	学習に対する積極的な姿勢を持ち、教室の枠を超えて学習を広げ、個人の知識を深める。様々な学習及びコミュニケーション戦略を用いて英語学習とコミュニケーションによる効果を向上させる	生徒たちは積極的に探索する姿勢を持ち、率先して教室の外で関連情報を探索し、学習の幅を広げ、英語力を高め、様々なリソースを活用し、自主的な学習を強化し、生涯学習の基礎を築く
	A-2.論理的思考と問題解決	問題理解、仮説的分析、推論、批評といった体系的で仮説的思考力を備え、人生や生活上の問題に効果的に対処・解決するために行動し熟考することができる	簡単な英語のメッセージを理解し、学習効果を高めるための基本的な論理的思考ストラテジーを適用する能力を実証する。	体系的な理解力と推理力を身につけ、文章中のメッセージの関係を明らかにしたり、メッセージを比較対照したりして推論することができ、国内外の文化の類似点と相違点を予備的に理解することができる	体系的思考力とメタ思考力を持ち、様々な戦略を駆使し、テキストメッセージや国内外の文化を深く理解しメッセージの本質と真偽を明らかにし学習効率と質を向上させ、学んだことを応用し問題を解決する
	A-3.計画実行、創造と適応	計画を立て実行する能力を持ち、多様な専門知識を探索・発展させ、人生経験を豊かにし、革新的な精神を発揮して社会の変化に対応する自己の柔軟性と順応性を高める能力を備えている		英語学習のスケジュールを簡易的に計画し、見直し、調整する能力を身につける	英語学習プログラムを計画、実施、見直す能力を示し、生涯学習の基礎を築くための効果的な戦略を探索

教科の中核的な概念等による構造化事例 (5 / 5)

<方向性①②関連>

(前頁続き)

- 教科学習において獲得すべきコンピテンシー内容と、学習評価の基準を示す「学習パフォーマンス」及び「学習内容」が対応付けられ、コンピテンシー獲得に向けて学習すべき内容が、学年ごとに段階をつけつつ一覧で確認できる点が特徴である。

◆教科学習（英語）におけるカリキュラム内容の構造化例②

「核心素養の内容」に、学習評価の基準を示す「学習パフォーマンス」、「学習内容」を対応させるマトリクス表

英語における学習ポイント		英語における核心素養の内容
学習パフォーマンス	学習内容	
6-Ⅱ-1： 教師の指示や学習に集中できる 6-Ⅱ-2： 授業内の様々な練習活動に参加する意欲があり、間違いを恐れない 7-Ⅲ-2： 辞書を使って単語やフレーズを調べることができる	—	まじめさ、集中力、よい学習習慣という資質を備え、基本的な学習戦略を用いて個人の英語能力を強化するよう努める
5-Ⅲ-3： 初級レベルの基本的な語彙や文系を理解し、読み取ることができる 7-Ⅲ-1： 新しい単語を学ぶために学習した単語を関連付ける 9-Ⅱ-1： 学習した単語を分類できる	Bコミュニケーション B-Ⅲ-2： 初級で学習した単語やフレーズ、文系を利用した日常的なコミュニケーション D思考力 D-Ⅱ-1： 学習した単語の簡単な分類	簡単な英語のメッセージを理解し、学習効果を高めるための基本的な論理的思考ストラテジーを適用する能力を実証する

「核心素養」に対応する評価基準を学年ごとに示す

※「6-Ⅱ-1」の「Ⅱ」は学年段階「国立小学校3～4年生」に対応し、「Ⅲ」は「国立小学校5～6年生」に対応

「核心素養」に対応する学習内容を学年ごとに示す

面向	核心素養	核心素養の内容	英語における核心素養の内容		
			国民小学 (初等教育相当)	国民中学 (前期中等教育相当)	高級中学 / 高級職業学校
A. 自主的行動	A-1. 心身の健康と自己の向上	健全な心身の発達、適切な人間性、自己観についての適切な見方を持つと同時に、新たな知識の選択・分析・応用を通じて、効果的にキャリア開発を計画し、人生の意味を追求し、常に自分自身を改善し、離隔を追求する	まじめさ、集中力、よい学習習慣という資質を備え、基本的な学習戦略を用いて個人の英語能力を強化するよう努める	学習に対する積極的な姿勢を持ち、教室の枠を超えて学習を広げ、個人の知識を深める。様々な学習及びコミュニケーション戦略を用いて英語学習とコミュニケーションによる効果を向上させる	生徒たちは積極的に探求する姿勢を持ち、率先して教室の外で関連情報を探求し、学習の幅を広げ、英語力を高め、様々なシーンを活用し、自主的な学習を強化し、生涯学習の基礎を築く
	A-2. 論理的思考と問題解決	問題理解、仮説的分析、推論、批評といった体系的で仮説的思考力を備え、人生や生活上の問題に効果的に対処・解決するために行動し熟考することができる	簡単な英語のメッセージを理解し、学習効果を高めるための基本的な論理的思考ストラテジーを適用する能力を実証する。	体系的な理解力と推理力を身につけ、文章中のメッセージの関係を明らかにしたり、メッセージを比較対照したりして推論することができ、国内外の文化の類似点と相違点を予備的に理解することができる	体系的思考力とメタ思考力を持ち、様々な戦略を駆使し、テキストメッセージや国内外の文化を深く理解し、メッセージの本質と真偽を明らかにし、学習効率と質を向上させ、学んだことを応用し問題を解決する
	A-3. 計画実行、創造と適応	計画を立て実行する能力を持ち、多様な専門知識を探究・発展させ、人生経験を豊かにし、革新的な精神を発揮して社会の変化に対応する自己の柔軟性と順応性を高める能力を備えている		英語学習のスケジュールを簡易的に計画し、見直し、調整する能力を身につける	英語学習プログラムを計画、実施、見直し能力を示し、生涯学習の基礎を築くための効果的な戦略を探究する

前頁で示した「面向」・「核心素養」と、学年段階の2軸で「核心素養」の内容を整理した表

教育課程の基準のデジタル化の事例（1 / 2）

- Web上でKUD^{*1}の3つの要素、教科、学年及びキーワード検索を掛け合わせて教育課程の基準を検索できる。
- 検索結果画面では、学年や検索条件を変更できることに加え、各教科の学習におけるゴールや授業実践例等を示す画面に遷移でき、関連する情報を体系的に確認できる。

Explore Curriculum

The curriculum search tool allows you to search for key words or select key elements from specific grades or areas of learning

Type	Subject	Grade
☐ Big Ideas	☐ Science	☐ K ☐ 1
☐ Content	☐ English Language Arts	☐ 2 ☐ 3
☐ Curriculum Competency	☐ Arts Education	☐ 4 ☐ 5
	☐ Physical and health Education	☐ 6 ☐ 7
	☐ Français langue seconde - Immersion	☐ Core French
	☐ Applied Design, Skills and Technologies	☐ Career Education
	☐ Languages	☐ 7 ☐ 8 ☐ 9
	☐ Second Languages	☐ 10 ☐ 11
	☐ Additional Offerings	☐ 12 ☐ 13A
		☐ 12B ☐ 12C
		☐ CLE

Include keyword

Search

Mathematics 1
Background Information + Change Grade +
Download +

Core Competencies
Communication + Thinking + Personal and Social +

Big Ideas

Numbers to 20

represent quantities that can be decomposed into 10s and 1s.

Addition and subtraction with numbers to 10 can be modelled concretely, pictorially, and symbolically to develop computational fluency.

Curricular Competency

Learning Standards

Students are expected to be able to do the following:

Reasoning and analyzing

- Use reasoning to explore and make connections
- Estimate reasonably
- Develop mental math strategies and abilities to make sense of quantities
- Use technology to explore mathematics
- Model mathematics in contextualized experiences

Understanding and solving

- Develop, demonstrate, and apply mathematical understanding through play, inquiry, and problem solving
- Visualize to explore mathematical concepts
- Develop and use multiple strategies to engage in problem solving
- Engage in problem-solving experiences that are connected to place, story, cultural practices, and perspectives relevant to local First Peoples communities, the local community, and other cultures

Communicating and representing

- Communicate mathematical thinking in many ways
- Use mathematical vocabulary and language to contribute to mathematical

Content

Learning Standards

Students are expected to know the following:

- number concepts to 20
- ways to make 10
- addition and subtraction to 20 (understanding of operation and process)
- repeating patterns with multiple elements and attributes
- change in quantity to 20, concretely and verbally
- meaning of equality and inequality
- direct measurement with non-standard tools (non-uniform and uniform)
- comparison of 2D shapes and 3D objects
- concrete graphs, using one-to-one correspondence
- likelihood of familiar life events, using comparative language
- financial literacy — values of coins, and monetary exchanges

凡例

画面操作に関する内容

画面内容に関する内容

検索画面にて、タイプ、教科、学年の観点とキーワードを掛け合わせてカリキュラムを検索可能

ビッグアイデア（Big Ideas）

- 児童生徒が各学年修了までに理解すべき重要な概念や原理
- 概念や原理の理解を促すために、指導上の発問例等もポップアップで示される

教科別コンピテンシー（Curricular Competency）

児童生徒にとって必要不可欠とされている内容

※個別の事実や情報の暗記ではなく、概念を深く理解し応用することが重視されている

コア・コンピテンシー（Core Competencies）

算数の学習を通して身につけるコンピテンシー

ポップアップ例

- decomposing 10 into parts
- Numbers to 10 can be arranged and recognized.
- benchmarks of 10 and 20
- Traditional First Peoples counting methods involved using fingers to count to 5 and for groups of 5.
- traditional songs/singing and stories

マウスポイントもしくは詳細ボタンを押下するとポップアップで詳細が表示される

教科内容（Contents）

ビッグアイデアに沿って、児童生徒が知るべき内容

教科内容（Contents）

ビッグアイデアに沿って、児童生徒が知るべき内容

※ 1 : KUDとは、「Know-Understand-Do」の頭文字を指す。

(出典) <https://curriculum.gov.bc.ca/curriculum/search> (2024年12月13日閲覧)

- Web上で「学習領域」、「汎用的能力」、「領域横断的優先事項」の3つのカテゴリからカリキュラムを検索・閲覧できる。
- 「学習領域」カテゴリでは、教科と学年を入力してカリキュラム内容を検索でき、検索結果画面では各教科の学習における理念、目標等の確認や、付与されているコードを通して指導方法等を確認できる。

凡例

- 画面操作に関する内容
- 画面内容に関する内容

学習領域、汎用的能力、領域横断的優先事項の3つの要素別カリキュラムを検索可能

学習領域では、教科と学年をキーにカリキュラムを検索可能

オーストラリアン・カリキュラムに関する動画が掲載されたページに遷移

各教科の学習における理念、目標等を確認できる画面に遷移

検索条件を変更可能

カリキュラムの内容

ストランド (strands)
教科についての理解を深め、習得を支援することを目的に設定される分類

サブストランド (sub strands)
上位のストランドに紐づく下位ストランド

各サブストランドに紐づく学習目的ごとにコードが付与されている

コードをクリックすると学習目的に関連する「汎用的能力」と「領域横断的優先事項」*1、指導方法、学習コンテンツが示されたページに遷移

タブ展開

Language for interacting with others

AC9E1LA01

understand how language, facial expressions and gestures are used to interact with others when asking for and providing information, making offers, exclaiming, requesting and giving commands

Elaborations (4) Related content (0) Resources (1)

AC9E1LA02

explore language to provide reasons for likes, dislikes and preferences

Elaborations (2) Related content (0) Resources (1)

English – Year 1

You're viewing curriculum for English – Year 1

Quick select Advanced select

Level description: Year 1

Content descriptions

View and sort by: Language Literature Literacy

Language

Literature

Literacy

Language for interacting with others

Text structure and organisation

Language for expressing and developing ideas

Literature and contexts

Texts in context

Phonic and word knowledge

※ 1 : 「オーストラリアン・カリキュラム」は、教科に該当する学習領域、7つの汎用的能力（リテラシー、ニューメナシー、ICT等）、3つの領域横断的優先事項（アボリジナル及びトレス海峡島嶼民の歴史と文化、アジア及びアジアとオーストラリアの関係性、サステナビリティ）の3要素で構成されており、教員は教科の学習の中で汎用的能力や領域横断的優先事項を明示的に教え評価することが期待されている。

（出典） <https://v9.australiancurriculum.edu.au/f-10-curriculum/learning-areas/english/year-1?view=quick&detailed-content-descriptions=0&hide-ccp=0&hide-gc=0&side-by-side=1&strands-start-index=0>（2024年12月13日閲覧）

学習評価に関して有識者検討会で指摘された課題

今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会 論点整理（抜粋）（令和6年9月18日）

3. 各教科等の目標・内容、方法、評価

（2）学習評価の現状と育成すべき資質・能力を踏まえた今後の対応

（現状）

- 資質・能力の育成につながるよう学習評価の質を高めていくことは、教師の力量形成や授業改善に直結するものであり、「指導と評価の一体化」を一層進めることが重要。
- 学習評価を「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点で行うこととした現行の観点別評価は、授業改善に重要な役割を果たすものである一方、特に「主体的に学習に取り組む態度」の観点については、「主体性」の意味が具体的に整理されていないこともあり、依然としてノート提出の頻度などの「勤勉さ」の評価に留まっている学校もある。
- また、毎回の授業で3観点全てを見取らないといけないといった誤解により、評価材料を集めることのみを目的に毎時間振り返りを書かせるなど、評価のための指導に迫られるいわゆる「指導の評価化」の状況が生まれるなど、教師・子供にとって息苦しくなっている場合もある。
- さらに、見取り・形成的評価・総括的評価が区別されず、学習評価の全てが総括的評価（評定の対象）として行われることにより、評価の結果が学習の改善に結び付きにくいという課題も指摘されている。

（今後の対応）

- こうした現状を踏まえた上で、教師の力量形成や授業改善に効果的で、子供の学習の改善に資するよう、学習評価の観点や頻度の在り方、また形成的評価と総括的評価の効果的な使い分けの在り方を検討すべき。
- 特に「主体的に学習に取り組む態度」の観点については、資質・能力としての「学びに向かう力、人間性等」の整理の状況を踏まえつつ、子供がより主体性を発揮できるようにする観点から検討すべき。
- 各教科等の目標・内容の構成の在り方自体も、学習評価の効果的な実施の在り方と適切に連携が図れるよう、一体的に検討することが重要。

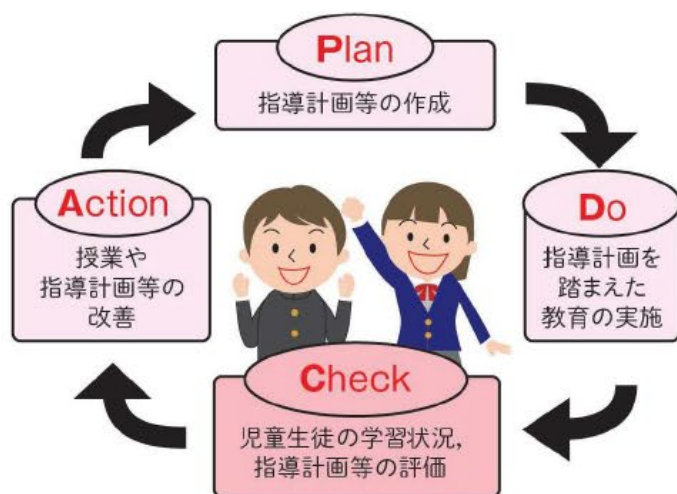
学習評価の基本的な考え方

学習評価は、学校における教育活動に関し、児童生徒の学習状況を評価するものです。「児童生徒にどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、**教師が指導の改善を図るとともに、児童生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするためにも**、学習評価の在り方は重要であり、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性のある取組を進めることが求められます。

カリキュラム・マネジメントの一環としての指導と評価

各学校は、日々の授業の下で児童生徒の学習状況を評価し、その結果を児童生徒の学習や教師による指導の改善や学校全体としての教育課程の改善、校務分掌を含めた組織運営等の改善に生かす中で、学校全体として組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図っています。

このように、「学習指導」と「学習評価」は学校の教育活動の根幹であり、教育課程に基づいて組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図る「カリキュラム・マネジメント」の中核的な役割を担っています。



主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善と評価

指導と評価の一体化を図るためには、児童生徒一人一人の学習の成立を促すための評価という視点を一層重視することによって、教師が自らの指導のねらいに応じて授業の中での児童生徒の学びを振り返り、学習や指導の改善に生かしていくというサイクルが大切です。平成29年改訂学習指導要領で重視している「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を通して、各教科等における資質・能力を確実に育成する上で、学習評価は重要な役割を担っています。

- ✓ 教師の指導改善に
つながるものにしていくこと
- ✓ 児童生徒の学習改善に
つながるものにしていくこと
- ✓ これまで慣行として行われてきたことでも、
必要性・妥当性が認められないものは
見直していくこと

次の授業では
〇〇を重点的に
指導しよう。



〇〇のところは
もっと～した方が
よいですね。



詳しくは、平成31年3月29日文部科学省初等中等教育局長通知「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」をご覧ください。
(http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/1415169.htm)



コラム

評価に戸惑う児童生徒の声

「先生によって観点の重みが違うんです。授業態度をとても重視する先生もいるし、テストだけで判断するという先生もいます。そうすると、どう努力していけばよいのか本当に分かりにくいんです。」（中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会 児童生徒の学習評価に関するワーキンググループ第7回における高等学校3年生の意見より）

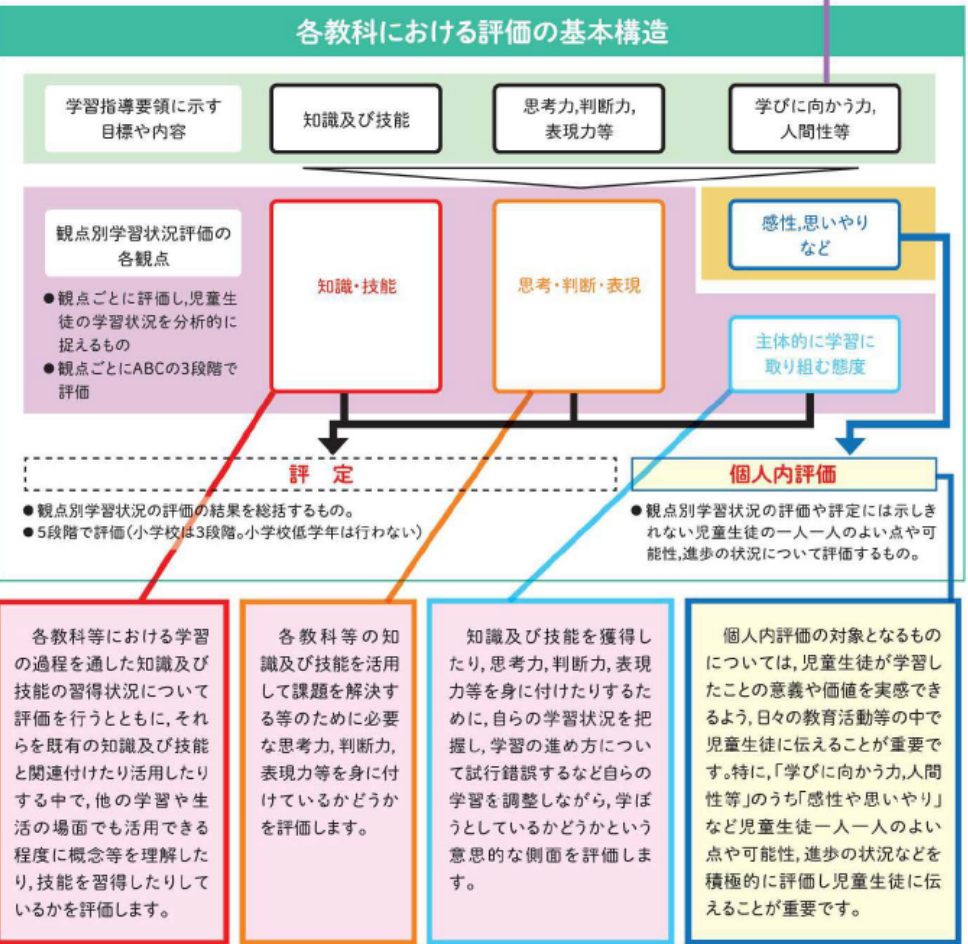
あくまでこれは一部の意見ですが、学習評価に対する児童生徒のこうした意見には、適切な評価を求める切実

な思いが込められています。そのような児童生徒の声に応えるためにも、教師は、児童生徒への学習状況のフィードバックや、授業改善に生かすという評価の機能を一層充実させる必要があります。教師と児童生徒が共に納得する学習評価を行うためには、評価規準を適切に設定し、評価の規準や方法について、教師と児童生徒及び保護者で共通理解を図るガイダンス的な機能と、児童生徒の自己評価と教師の評価を結び付けていくカウンセリング的な機能を充実させていくことが重要です。

学習評価の基本構造

平成29年改訂で、学習指導要領の目標及び内容が、資質・能力の三つの柱で再整理されたことを踏まえ、各教科における観点別学習状況の評価の観点については、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点到整理されています。

「学びに向かう力、人間性等」には
①「主体的に学習に取り組む態度」として観点別評価(学習状況を分析的に捉える)を通じて見取ることができる部分と、
②観点別評価や評定にはなじまず、こうした評価では示しきれないことから個人内評価を通じて見取る部分があります。



詳しくは、平成31年1月21日文科科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」をご覧ください。
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/1412933.htm)



特別の教科 道徳、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動の評価について

特別の教科 道徳、外国語活動(小学校のみ)、総合的な学習の時間、特別活動についても、学習指導要領で示したそれぞれの目標や特質に応じ、適切に評価します。なお、道徳科の評価は、入学選抜の可否判定に活用することのないようにする必要があります。

特別の教科 道徳(道徳科)

児童生徒の人格そのものに働きかけ、道徳性を養うことを目標とする道徳科の評価としては、観点別評価は妥当ではありません。授業において児童生徒に考えさせることを明確にして、「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を(広い視野から)多面的・多角的に考え、自己の(人間としての)生き方についての考えを深める」という学習活動における児童生徒の具体的な取組状況を、一定のまとまりの中で、児童生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を適切に設定しつつ、学習活動全体を通して見取ります。

外国語活動(小学校のみ)

評価の観点については、学習指導要領に示す「第1目標」を踏まえ、右の表を参考に設定することとしています。この3つの観点に則して児童の学習状況を見取ります。

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
●外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深めている。 ●日本語と外国語の音声の違い等に気付いている。 ●外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しんでいる。	身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合っている。	外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとしている。

総合的な学習の時間

評価の観点については、学習指導要領に示す「第1目標」を踏まえ、各学校において具体的に定めた目標、内容に基づいて、右の表を参考に定めることとしています。この3つの観点に則して児童生徒の学習状況を見取ります。

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識や技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解している。	実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現している。	探究的な学習に主体的・協働的に取り組もうとしているとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとしている。

特別活動

特別活動の特質と学校の創意工夫を生かすということから、設置者ではなく、各学校が評価の観点を定めることとしています。その際、学習指導要領に示す特別活動の目標や学校として重点化した内容を踏まえ、例えば以下のように、具体的に観点を示すことが考えられます。

特別活動の記録								
内容	観点	学年	1	2	3	4	5	6
学級活動	よりよい生活を築くための知識・技能 集団や社会の形成者としての思考・判断・表現 主体的に生活や人間関係をよりよくしようとする態度		○		○	○	○	
児童会活動				○	○		○	
クラブ活動						○		
学校行事				○		○	○	

各学校で定めた観点を記入した上で、内容ごとに、十分満足できる状況にあると判断される場合に、○印を記入します。
○印をつけた具体的な活動の状況等については、「総合所見及び指導上参考となる諸事項」の欄に簡潔に記述することで、評価の根拠を記録に残すことができます。

小学校児童指導要領(参考様式)様式2の記入例(5年生の例)

なお、特別活動は学級担任以外の教師が指導する活動が多いことから、評価体制を確立し、共通理解を図って、児童生徒のよさや可能性を多面的・総合的に評価するとともに、確実に資質・能力が育成されるよう指導の改善に生かすことが求められます。

観点別学習状況の評価について

観点別学習状況の評価とは、学習指導要領に示す目標に照らして、その実現状況がどのようなものであるかを、観点ごとに評価し、児童生徒の学習状況を分析的に捉えるものです。

「知識・技能」の評価の方法

「知識・技能」の評価の考え方は、従前の評価の観点である「知識・理解」、「技能」においても重視してきたところです。具体的な評価方法としては、例えばペーパーテストにおいて、事実的な知識の習得を問う問題と、知識の概念的な理解を問う問題とのバランスに配慮するなどの工夫改善を図る等が考えられます。また、児童生徒が文章による説明をしたり、各教科等の内容の特質に応じて、観察・実験をしたり、式やグラフで表現したりするなど実際に知識や技能を用いる場面を設けるなど、多様な方法を適切に取り入れていくこと等も考えられます。

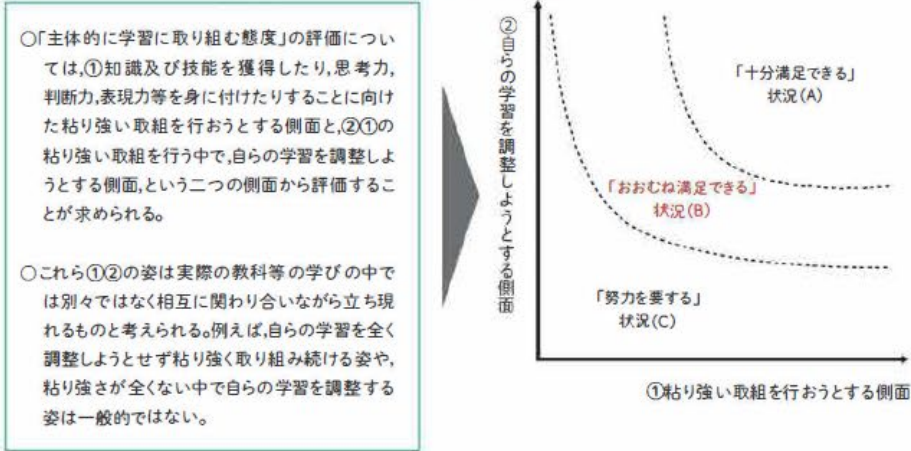
「思考・判断・表現」の評価の方法

「思考・判断・表現」の評価の考え方は、従前の評価の観点である「思考・判断・表現」においても重視してきたところです。具体的な評価方法としては、ペーパーテストのみならず、論述やレポートの作成、発表、グループや学級における話し合い、作品の制作や表現等の多様な活動を取り入れたりと、それらを集めたポートフォリオを活用したりするなど評価方法を工夫することが考えられます。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価の方法

具体的な評価方法としては、ノートやレポート等における記述、授業中の発言、教師による行動観察や、児童生徒による自己評価や相互評価等の状況を教師が評価を行う際に考慮する材料の一つとして用いることなどが考えられます。その際、各教科等の特質に応じて、児童生徒の発達の段階や一人一人の個性を十分に考慮しながら、「知識・技能」や「思考・判断・表現」の観点の状況を踏まえた上で、評価を行う必要があります。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価のイメージ



ここでの評価は、その学習の調整が「適切に行われるか」を必ずしも判断するものではなく、学習の調整が知識及び技能の習得などに結びついていない場合には、教師が学習の進め方を適切に指導することが求められます。

「自らの学習を調整しようとする側面」とは…

自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなどの意思的な側面のことです。評価に当たっては、児童生徒が自らの理解の状況を振り返ることができるような発問の工夫をしたり、自らの考えを記述したり話し合ったりする場面、他者との協働を通じて自らの考えを相対化する場面を、単元や題材などの内容のまとまりの中で設けたりするなど、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を図る中で、適切に評価できるようにしていくことが重要です。



コラム

「主体的に学習に取り組む態度」は、「関心・意欲・態度」と同じ趣旨ですが…
～こんなことで評価をしていませんか？～

平成31年1月21日文科科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」では、学習評価について指摘されている課題として、「関心・意欲・態度」の観点について「学校や教師の状況によっては、挙手の回数や毎時間ノートを取っているかなど、性格や行動面の傾向が一時的に表出された場면을捉える評価であるような誤解が払拭し切れていない」ということが指摘されました。これを受け、従来から重視されてきた各教科等の学習内容に関心をもつことのみならず、よりよく学ぼうとする意欲をもって学習に取り組む態度を評価するという趣旨が改めて強調されました。

学習評価の妥当性、信頼性を高める工夫の例

- 評価規準や評価方法について、事前に教師同士で検討するなどして明確にすること、評価に関する実践事例を蓄積し共有していくこと、評価結果についての検討を通じて評価に係る教師の力量の向上を図ることなど、学校として組織的かつ計画的に取り組む。
- 学校が児童生徒や保護者に対し、評価に関する仕組みについて事前に説明したり、評価結果について丁寧に説明したりするなど、評価に関する情報をより積極的に提供し児童生徒や保護者の理解を図る。

評価時期の工夫の例

- 日々の授業の中では児童生徒の学習状況を把握して指導に生かすことに重点を置きつつ、各教科における「知識・技能」及び「思考・判断・表現」の評価の記録については、原則として単元や題材などのまとまりごとに、それぞれの実現状況が把握できる段階で評価を行う。
- 学習指導要領に定められた各教科等の目標や内容の特質に照らして、複数の単元や題材などにわたって長期的な視点で評価することを可能とする。

学年や学校間の円滑な接続を図る工夫の例

- 「キャリア・パスポート」を活用し、児童生徒の学びをつなげることができるようにする。
- 小学校段階においては、幼児期の教育との接続を意識した「スタートカリキュラム」を一層充実させる。
- 高等学校段階においては、入学者選抜の方針や選抜方法の組合せ、調査書の利用方法、学力検査の内容等について見直しを図ることが考えられる。

評価方法の工夫の例

全国学力・学習状況調査
(問題や授業アイデア例)を参考にした例

平成19年度より毎年行われている全国学力・学習状況調査では、知識及び技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力などに関わる内容の問題が出題されています。

全国学力・学習状況調査の解説資料や報告書、授業アイデア例を参考にテストを作成したり、授業を工夫したりすることもできます。

詳しくは、国立教育政策研究所Webページ「全国学力・学習状況調査」をご覧ください。
(<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/zenkokugakuryoku.html>)



授業アイデア例



評価の方法の共有で働き方改革

ペーパーテスト等のみにとらわれず、一人一人の学びに着目して評価をすることは、教師の負担が増えることのように感じられるかもしれませんが、児童生徒の学習評価は教育活動の根幹であり、「カリキュラム・マネジメント」の中核的な役割を担っています。その際、助けとなるのは、教師間の協働と共有です。

評価の方法やそのためのツールについての悩みを一人で

抱えることなく、学校全体や他校との連携の中で、計画や評価ツールの作成を分担するなど、これまで以上に協働と共有を進めれば、教師一人当たりの量的・時間的・精神的な負担の軽減につながります。風通しのよい評価体制を教師間で作っていくことで、評価方法の工夫改善と働き方改革にもつながります。

